

5年 わたしの地図活用

地図帳から人々の生活を考える
—デジタル地図帳を活用して—

長野県公立小学校 教諭

1 はじめに

小学校学習指導要領では、地形条件や気候条件からみて特色ある地域を取りあげ、自然環境に適応しながら生活している人々のくふうを具体的に調べ、地形や気候に合わせた住まいや学校生活などの日常生活のようす、地形や気候の特色を生かした野菜や果物、花卉の栽培、酪農、観光などの産業を取りあげることが求められている。そこで、『デジタル教科書 楽しく学ぶ小学生の地図帳』（以下『デジタル地図帳』）を活用した、中央高地の人々の生活を学ぶ実践例を紹介する。

2 野辺山原の人々の生活を
地図帳から読み取る

- ・ 標高が高いこと、東京と比較して8月の平均気温が低いこと、レタスやはくさい、乳牛の生産がさかんなこと、野菜集出荷場や冷凍・冷蔵トラックがあること (p.31・32)
- ・ 野辺山原から東京や大阪との位置関係と高速道路網 (p.67・68)
- ・ レタスの生産量が全国1位で、全国生産量の3分の1を占めること
- ・ レタスを生産する人々のくふう (写真資料 長野県)
※『デジタル地図帳』のみ収録

以上のような情報が、資料集を活用しなくても地図帳や『デジタル地図帳』から収集することができる。このような教材研究をもとにしながら授業を構想した。

3 中央高地はどのような地形なのだろうか

地名、山、川の名前を調べるために地図帳を活用することは慣れている子どもたちだが、地図帳にある多くの情報を収集できるように、地図帳の使い方や地図からどのようなことがわかるのかを、p.5～10を使い、ていねいに教えてきた。そのうえで今回は『デジタル地図帳』を取り入れ、中央高地の中でも、子どもたちにとって身近な野辺山原の人々の生活を考える授業を行った。

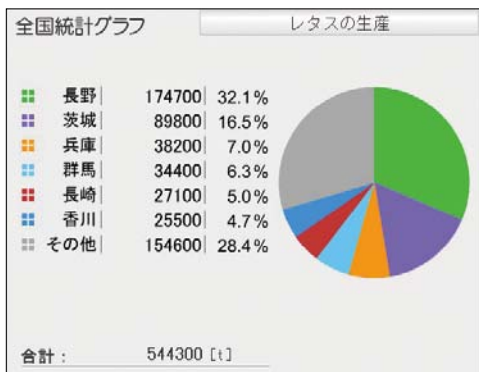
まず、子どもたちに、野辺山原について知っていることを問いかけると、「**ここよりも標高が高い**」、「**夏は涼しく、冬の寒さはきびしい**」、「**スケートやスキーがさかん**」などの答えが返ってきた。そこで、電子黒板でp.31・32を映しだし、色に着目して野辺山原の地形を児童といっしょに確認した。そうすることにより、野辺山原は高い山に囲まれており、標高が高いことを実感していった。

続いて、野辺山原の人々の生活を考える学習に進み、標高の高さを人々はどのように生かしているのか想像してみるように促した。子どもたちは生活経験をもとに、「**夏に避暑地として訪れる観光客に対する商売がさかんなのではないか**」、「**冬のスポーツがさかんなのではないか**」など、第3次産業の内容が多くあがり、野菜栽培までは意識が向いていなかった。そこで、p.31の②「高地のくらし」を電子黒板で拡大し、そこから読み取れることを出し合った。「**標高が高いことから夏の平均気温が東京よりも低い**」、「**レタス、キャベツ、はくさいがたくさんつくられている**」、「**乳牛が飼われている**」ことなど、出し合った情報を電子黒板でマーキングしていくと、みんなの意見を集約した図ができあがった。



児童の意見を集約した『デジタル地図帳』の図

続いて、『デジタル地図帳』でレタスの生産の統計資料を提示し、長野県が全国1位で、全国の生産量の3分の1を占めることを円グラフで視覚的に確認してから、「野辺山原では、なぜレタスやはくさいがたくさんつくられているのか」という問いかけをした。



長野県の統計資料：レタスの生産の円グラフ

4 野辺山原のレタス栽培のくふうや努力

今までの学習で、子どもたちは人々の生活は地形や気候とかかわりがあることを理解しているので、レタス栽培にも地形や気候が影響しているのではないかと予想をした。そこで、『デジタル地図帳』でp.31の②「高地の暮らし」の中の、野辺山原の気温のグラフを大きく提示して、学習問題を追究するように促した。子どもたちは、レタス栽培に適した気温は15～20℃であることと、長野県のレタスは6～9月に多いこと、野辺山原の6～9

月の平均気温とを関連づけて考え、地形や気候の利点を生かしてレタス栽培を行っていることに気づくことができた。さらに、『デジタル地図帳』p.68の③「工業の分布」の図を利用して、高速道路で東京や大阪と結びつく、中央高地の地理的な位置がレタスの出荷の利点となっていることをつかった。



野辺山原の地理的利点を書き込んで示した図

こうしたことを理解したうえで、『デジタル地図帳』に音声つきで収録されている野辺山原の野菜農家の人の話をメモを取りながら聞くことで、火山性のやせた土地を改良して高原野菜づくりが始まったことや、新鮮なまま大都市の市場へ出荷できる冷凍・冷蔵トラックが使用されていること、豊作か不作かで野菜の価格が大きく変わるのが悩みであることを知っていった。

『デジタル地図帳』に加え、レタスのいたみをポリスチレンフィルムとラップとで比較したり、南牧村のホームページを活用（ハウス内での育苗、低温保冷車など）したりする体験型の学習もおりませることで、人々のくふうや努力を感得できたようすであった。

5 おわりに

地図帳には多くの情報があり、大変貴重な教材だと思う。さらに、『デジタル地図帳』を使用すると、子どもたちの関心が高まることや、視線が電子黒板に集中するので理解度を表情から読み取ることのよさが実感できた。